

平成 23 年度 大学職員情報化研究講習会 ～応用コース～  
第 6 分科会 チーム K 報告書

【テーマ】きっかけを与え続ける取組～自ら考え行動する学生を育成するために～

<グループメンバー>

- ◎：司会進行役 ○：発表者 △：書記 ▲：報告書 □：発表資料 ■：発表評価
- 戸塚 絵梨子 (共立女子大学・就職進路課)
- 大村 卓也 (甲南大学・西宮キャンパス事務室)
- 忠政 慎也 (倉敷芸術科学大学・学務部教務課課長)
- 原口 誠 (九州共立女子大学・総務課係長)
- ◎松熊 孝文 (久留米大学・附設高等学校中学校事務室係長)
- △▲新見 拓 (日本システム技術株式会社文教事業部 GAKUEN ソリューション課)

<はじめに>

『事前研修』にて各参加者が「参加者及び所属大学の基礎的情報」「討議希望テーマ」「参加の動機・自大学の課題」「ニーズカード」を作成し、予め設定されたメーリングリストを利用して、各大学の状況・課題・ニーズを相互に確認し、基本的な情報を共有した。

<討議内容>

【1 日目】

(1) 全大会に関するフリーディスカッション

自己紹介を兼ねて、全大会で実施された講義等について、各人が重要と思うキーワードを確認し、共有化を図った。

- 公開(受動的)と公表(能動的)の違い
- 中退率
- Data⇒Information⇒Intelligence

(2) 各大学の事例紹介 (課題・ニーズの紹介)

事前準備で作成したニーズカードを各人が発表し、各大学の課題・ニーズについての共有化を図るとともに、各大学の共通点を纏めることで、大学の理想像についての方向性を深めっていった。

① 各大学のニーズ(要点)

- 高校生から大学生に切り替わる事が難しく、退学していく学生が多くみられ

る。受け身の高校生から主体的な大学生にどのように切り替えていくかを議論していきたい。

- 学生同士が早期に交流を図るために入学前から利用できる SNS を導入している。
- 現在は利用率が 50%程度であるため、SNS をいかに活用し、評価していくかを議論したい。
- 活気あふれる大学にするために、学生からの意見を取り入れて、学生と一緒に大学を盛り上げていく前向きな活動ができないかを検討したい。
- 高校生は大学の生の声を知らず、またコミュニケーションをとれない学生もいる。受験前の高校生に大学の楽しさや魅力を伝えていくアプローチを行ってほしい。
- 教職員と学生が参加している SNS があり、様々なコミュニティがあるが、バーチャルな世界で閉じてしまっている傾向にある。バーチャルな世界からリアルなアクションに結び付けてほしい。学生には、能動的に活動してほしい。
- SNS を利用することで上級生や卒業生とコンタクトがとれ、卒業生の声やロールモデルを聞くことで、就職の支援が出来るなど、SNS の活性化について議論したい。

## ② グループ結論

大学の理想像は次の方向性で議論を進めていくことになった。入学前から在学中・卒業後まで学生が目標を持って充実した学生生活を送るために教職員がサポートしていくことが大切である。また、学生が目標を持つために、気付きを得ることができるためのサポートを行う必要がある。

## 【2日目】

### (1) 理想の姿（ビジョン）を形成するための討議

昨日の討議の結論であった「入学前から在学中、卒業後までにいかに目的を持って豊かな学生生活を送るか」ということを踏まえ、チームが進むべき方向性である理想の姿（ビジョン）を導き出すために、各人の考える理想イメージと事前研修で作成したニーズカードから「豊かな学生生活」をキーワードとしたニーズを抽出し、討議を行った。

#### ① 各人の抽出した理想像

- 目的や目標を持って充実した学生生活を送ることで、一人でも多くの学生が望んだ就職先に進めることが理想
- OB・OG が在学中どのような学生生活を送っていたか発信できるなど、学生が他の学生の活動を知ることができる仕組みが必要。

- 豊かな学生生活を送るためには、出会いが大切である。様々な活動を通して、いかに学生の心を動かすかが大切である。
- リアルな場でのコミュニケーションを持つことが大切。
- 教職員からの情報発信を行うことが必要。
- 自分を知るために大学からいかに刺激をすることができるかが大事。
- 学生自らが率先して活動するような楽しいネタ作りや環境作りが必要。
- 横の繋がり、縦の繋がりなど、常に繋がりを持っていることが大事。

## ② 理想イメージの纏め

上記の理想イメージを纏めることで、チームが進むべき理想像（ビジョン）の輪郭を描き出すことができた。

- 入学から卒業後までの繋がり、受験生、在學生、卒業生、保護者との繋がりが必要であり、繋がりを作るためには、バーチャル・リアルを併用することで学生に気づきを与えることができるために、職員が黒子になって、環境の整備、情報の提供を行う。
- 学生が豊かな学生生活を送るために、様々な場を提供していく。
- 最終的には **face to face** の繋がりへ導くために **ICT** を活用する。
- 外部との繋がりを通じて、自己の内面を見つめ直すしかけが必要。

## (2) 理想の姿（ビジョン）を形成し、チーム内で共有する。

次に理想の姿（ビジョン）を形成するための議論を実施した。

### ① 討議内容（要点）

- 入学前から卒業後まで大学がきっかけを与え続けられる取組はどうか。
- 今までのルールだけではない、主体性を持った学生になって欲しい。
- 充実した学生生活は目標を持つことが重要。
- 充実した学生生活は一つのスタイルであり、学生がどうなって欲しいのか、大学の使命は何かなどより上位のビジョンを描くことが必要である。
- 充実するという定義には自主性、主体性、能動性、気づき、きっかけ、目標を持つなどの要素が必要。
- 現在の学生の課題は、目的意識の欠如、低学力、つながりの欠如、人材の育成、自主性の欠如などがあり、一番の課題は目的意識の欠如、繋がりへの欠如が共通認識であった。
- 最終的には自ら主体的に考え動ける学生になって欲しい。

## ② 導き出された理想像（ビジョン）

討議を通じ、理想の姿（ビジョン）を導き出した。

- 大学の使命：自ら考え、行動する学生の育成
- 目標：受け身の学生に主体性を持たせたい
- そのためには、学生が何かに気づく機会を与え続ける
- 何かに気づくためには、人と人との繋がりが必要

## (3) 中間発表

各チームが中間発表として、チーム名と理想像（ビジョン）を発表した。

- テーマは「入学前から卒業後まできっかけを与え続ける取組～自ら考え、行動する学生を育成するために～」とした。
- 明確な目標や目的を持たずに入学する学生が増加している。
- 受け身な高校生から主体的な大学生の変容に戸惑う学生が増加している。
- その背景として人間関係が希薄になっていることがあげられる。
- そのため人と人との繋がりを深めるための取組を検討したい。

## (4) 目的を明確化する。

### ① 目的の列挙

チーム内で理想像（ビジョン）の目的を検討した。

- 在学生同士のコミュニケーションを促して、協力し合える環境を作る
- 学生と教職員がコミュニケーションを取り、教職員が適切なタイミングで助言を与える
- 学生と教職員がコミュニケーションを取り、学生から気軽に相談できるようにする
- 職員同士のコミュニケーションを取り、学生に対して適切な対応を行えるようにする
- 受験生と在学生在がコミュニケーションを取り、受験生の意欲を向上させる
- 卒業生と在学生在がコミュニケーションを取り、在学生の意欲を向上させる
- 学生が自分の内面を見つめる機会を作る
- 大学と保護者がコミュニケーションを取り、気軽に相談できる環境を作る。

### ② 目的の明確化

- 最終的には上記の目的全てを実施しなければならないが、今回考えるターゲットは自ら考え行動するために、入学直後にターゲットを絞り考えていく。
- 受け身的な学生同士だけでは、行き詰ってしまうため、引っ張る学生として上級生がいないといけない。

(5) 実現案を検討する。

次にそれぞれの目的を達成するための実現案を検討した。列挙した目的の中から特に重要である「在学生同士のコミュニケーションを通じて、協力し合える環境を作る」に絞り、その具体的な仕掛けと課題を考案した。

① 実現案の検討

- face to face の対応が一番重要であるが学生同士のコミュニケーションを促進する策として、SNS を活用する。
- リアルとバーチャルを融合した取組を考える。
- 実在するコミュニティ（部活、サークル、クラス）を SNS 上で再現して、リアルなコミュニティへ誘うようにする。
- 推進役として研修を受けた上級生が担当する。
- また、コミュニティに参加していた新入生が上級生になった際に推進役になることで、学生の主体性を醸成することができる。

② 実現案の課題検討

- 推進役となる上級生へのインセンティブをいかに与えていくか（単位認定等）
- 推進役となる上級生への研修プログラムの検討。
- 個人情報管理
- 教職員がどこまでサポートしていくかのライン
- 稼働率が悪い場合、どのようにして稼働率をあげるか。
- 学生 SOS の窓口作成

(6) 必要な制約と評価方法を検討する。

次に運用の成果を評価するための必要な制約を設定するとともに評価方法を検討した。

① 必要な制約の検討

- 全ての学生に機会を与えるために、原則強制加入とする。
- 学生の誹謗・中傷や内部で得た情報を外部へ持ち出す事がないような学生への利用マナーを徹底する必要がある。
- バーチャルな出会いがリアルに結びつくように実名での登録を基本とする。
- コミュニティの管理を統制するために、新規コミュニティを作成する場合は教職員の許可を必要とする。

② 評価方法の検討

- 定期的な自己評価アンケートを作成することで、自己の内面の成長を図る。
- 稼働率や友達数、コミュニティ数、アクセス数、発言数を指標とする。

### 【3日目】

#### (1)発表準備

資料の最終チェックと議論が不足していた点を確認し、発表に向けたまとめに入った。全体の構成の再確認、論理に矛盾がないか、発表をする際にどこに力点を置くかなどを中心に議論を深めた。

- 「きっかけを与える」ではなく、「きっかけを与え続ける」とする。
- 評価方法として、イベントなどのリアルな活動の評価も含まれる。

#### (2)発表

上記検討を踏まえて、発表を行った。

#### (3)相互評価

駅伝 B チームからの意見として、以下のものが挙げられた。

- 教職員がどれだけサポートに入るのか。サポートのバランスを模索する必要がある。

#### <まとめ>

学生同士のコミュニケーションを発展させることで、人と人との繋がりを持たせることができる。それにより学生に新たな気づきが生まれることによって、学生が主体的に活動することができるようになると思われる。さらに上級生に新入生のサポート役を担わせることによって、彼らの成長を促すことができると考える。このプログラムを各大学が今後どのように活かしていくか、また実際に実現可能なのかについては、事後研修のアクションプランとして提案したい。